

アトラス 細胞診と病理診断

亀井敏昭, 谷山清己 編

＜書評者＞ 藏本博行 (日本細胞診断学推進協会副理事長/北里大学名誉教授/財団法人神奈川県予防医学協会婦人検診部部长)

細胞病理診断の素晴らしい啓発書が刊行された。

細胞診は、細胞所見を鏡検して病変全体を診断する、つまり海上に飛び出している一部の所見をもとに氷山の全体を見極めるに等しい診断法である。したがって、細胞診断にあたっては、目では個々の細胞の微細な変異を読み取りながら、これとは逆に頭の中では広角カメラのように病変全体の組織像を思考する姿勢が求められる。そのため、細胞診断の専門家であるためには、細胞の微細な変異を読み取る能力ばかりでなく、病理組織像を理解しておくことが不可欠である。

本書は、ともすれば細胞像の提示だけになりやすかったこれまでの細胞診の教本を脱却して、細胞像とこれらの由来した組織像をあ

わせて提示する、斬新なアイデアを基にして企画された、優れた啓発書である。両者の写真が美しく科学的であるばかりでなく、何処に着目すべきかを示す綺麗なイラストも付けられている。しかも、細胞所見と組織所見の説明に加えて、定義、頻度や臨床所見、果ては一層勉強したい読者用に文献まで提示されている。さらに驚いたことに、1 ページで完結する記載で、1 ページを理解すれば1 疾患がわかる構成となっている。心憎いばかりに行き届いた気配りである。

日本臨床細胞学会では、細胞診断の専門家（細胞診専門医と細胞検査士）を認定しているが、近年、細胞診専門医研修ガイドラインを策定した。社会から細胞診断を任される専門家がどのような専門的

知識を心得ておくべきかを示す指針である。本書の編集者は、このガイドライン策定委員会の中心的メンバーであった。本書に取り上げられた 150 例の癌・非癌病変は、ガイドラインに掲載されている、知っておくべき「必須」項目を細胞像と組織像で具現したものであるともいえる。また、本書の総論に記載された内容には、検鏡の前に心得ておくべき細胞に関する基礎知識が網羅されている。さらに、ガイドラインを超えて、各所に“Topics”として最新の知識がちりばめられているのには、正直、頭が下がる思いである。

本書は、細胞診専門医をめざす医師にとって必見の教科書であるばかりでなく、細胞診専門医・細胞検査士や細胞診にかかわる臨床医のレベルアップのための、座右の書としてお勧めしたい。

●A4 頁 200 2010 年
定価 10,500 円
(本体 10,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00941-6]
医学書院 刊